

令和4年度

## 目黒日本大学中学校

## 入学試験問題

## 国語

試験時間 50分

## 注意事項

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- この問題冊子は、全14ページあります。
- 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図がありましたら、解答用紙を取り出してください。
- 解答はすべて解答用紙の決められた欄らんに記入してください。
- 試験中に質問がある場合は、手を挙げて監督者かんとくしゃに知らせてください。
- 試験終了後、監督者の指示にしたがって解答用紙を提出してください。
- 解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。
- 解答は、特に指示がないかぎり、句読点や記号をふくむものとしします。

受験番号	氏名



一

次の各問いに答えなさい。

問1 次のぼうせん部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 蚕を育てる。
- ② 鋼のような気持ち。
- ③ 著しい成果。

問2 次のぼうせん部のカタカナを漢字で答えなさい。

- ① コウシュウの面前。
- ② 仕事につく。
- ③ ケイコクをうける。

## 二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

現代日本の風呂場に置かれたさまざまな事物を目の当たりにしたルシウスは、折に触れてそう嘆息しながら、自身が誇りをもっていたローマ文明との落差に、絶望に近いショックを毎回受けます。その姿に、読者である僕らは思わず笑ってしまうのです。

『テルマエ・ロマエ』の面白さの理由は、ルシウスの「真剣さ」と「勘違い」にあります。

その真剣さと勘違いが、毎度笑いを誘います。

ルシウスは現代の風呂文化の様々なアイテムや仕組みに驚嘆した後、手に取ったり観察したりして熱心に調べます。そして、そのアイデアを何とかしてもとの世界、つまり古代ローマへ持ち帰って再現し、広めなければならぬという思いに駆られます。

ルシウスは実にさまざまな勘違いをします。たとえば、システムバス会社のショールームにタイムスリップしてしまったエピソード。ショールームのトイレに駆け込んだルシウスは、最新のウォシュレット便器のフタが自動で開き、音楽が流れるのを目撃すると「何人の奴隷を使っているのだ」と戦慄します（そのセリフの横にはフタ開け係、音楽係の二人の奴隷の絵が差し込まれています）。

温水プールに来てしまったときは、ウォータースライダーを目にして

「叫び声を上げながら平たい顔の子供がとめどなく滑り落ちてくる。もしかこれは精神力をきたえる為の装置なのではないだろうか!? かつてスパルタでは子供に過酷な修行をさせて国力増強を図っていたが……」

（実際滑ったあと）「怖いが 愉快だ!!」「これはローマ市民に確実にウケる!!」  
と真顔で考えます。

さて、さきほど僕は「テルマエ・ロマエ」をS、Fと呼びました。

なぜSFと呼べるのか？

それは、小松左京によるSFの定義のうち、「日常的な状況で、異様な人物が登場する物語」に当てはまるからです。僕らの日常に迷い込んでしまった異様な人物ルシウス。

そして星新一によれば、ある物語がSFであるならば、そこには根源的な問いかけがあるということになります。そしてその中では、僕らが構造的に見落としてしまっているものが可視化されているはず③です。

『テルマエ・ロマエ』においては何が問われ、何が可視化されているのでしょうか？

ルシウスの「驚き」の意味

異様な人物、つまり言語ゲームの他者であるルシウスは僕らに何を教えてくれるのか。

それはルシウスの「驚き」に示されています。

ルシウスは、現代を生きる僕らに何が与えられているのかを教えてください。

ルシウスが見て驚くもの、驚く対象。それは、古代ローマには存在してなくて、現代においては存在しているもののおよそすべてです。それらは、僕らが気づかぬうちに受け取っていた贈与なのです。

なぜなら、古代ローマには存在していなかったということは、この世界に初めからあったわけではないものです。

ということは、歴史の過程で、それを生み出した誰かがいる、ということになります。

だとすれば、それは誰かからの僕らに宛てた贈り物と言えます。

そして、その対象物が存在しない世界、与えられていない世界からやってきてしまった主体であるからこそ、それが「ただそこにある」だけでルシウスは驚くのです。

つまり、ルシウスの目にはそこにあるあらゆるものが、あるはずのないもの、あつてはならないもの、アノマリーに映るのです。そして、そんなアノマリーだからこそ、彼の目にはそれが自分宛の贈り物に見えてしまったのです。

(中略)

何気ない日常の中で、あふれている無数の贈与（のありがたみ）は隠されています。

それらは「あつて当たり前」であつて、それが無ければ僕らは文句を言う<sup>④</sup>。

コンビニの陳列棚の商品、自動販売機、部屋の空調設備、電車の定時運行、あるいは衛生環境やインフラ、医療――。

逆接的なことに、現代に生きる僕らは、何か「無い」ことには気づくことができますが、何か「ある」ことには気づきません。

いや、正確には、ただそこに「ある」ということを忘れてしまっているのです。だから僕らは「ただそこにあるもの」を言葉で述べることができませぬ。それはすなわち、それらが与えられたものであること、それがただそこに存在するという事実が驚くべきことであること、そして、もし失われてしまえば心底困り果ててしまうことに気づくことができないということです。

だから、『アルマエ・ロマエ』の中で、ルシウスはその逆を行うのです。いちいち驚嘆するのです。ルシウスは「そこにあるはずのないものがある」という単純な事実を僕らに伝えてくれているのです。

ルシウスの「驚く」という所作は、まさに僕らの言語ゲームと逆の行為<sup>⑥</sup>です。

僕らにとつては「あつて当たり前」であり、それらが失われた状況を念頭に置いて生活することができません。大きな災害の後は、少しの間はその有難みを実感できますが、生活が日常に戻<sup>もど</sup>ってしばらくすると、その有難みはしだいに薄<sup>うす</sup>れ、忘れてしまいます。

他方、ルシウスはそもそも「それが無くて当たり前」の世界を生きていて、それが「ある」という状況を想像することすらできません。だから彼は真剣に、過剰なまでに驚くのです。

（近内悠太『世界は贈与でできている』）

※『テルマエ・ロマエ』：ローマ浴場設計技師ルシウスが現代日本にタイムスリップするコメディ。ルシウスは、ワープしてしまったのが未来の世界であることを知らない。

問1 ぼうせん部①「真顔で考えます」とあるが、なぜ「真顔」なのか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 古代ローマにないものを調べて再現し、普及<sup>ふきゅう</sup>しようと激しい感情に突き動かされていたから。
- イ ローマへ様々なアイデアを持ち帰らないと、他国に支配されてしまう危機感をもっていたから。
- ウ ローマの文明がたいしたものではなかったことに気づかされたが、平静を装<sup>ま</sup>っていたから。
- エ 今見ているものすべてが信じられず、自分に与えられたものに感謝の気持ちを抱<sup>いだ</sup>いていたから。

問2 ぼうせん部②「異様な人物」を言いかえた箇所<sup>か</sup>を本文中から三十五字以内でぬき出し、初めの五字を答えなさい。

問3 ぼうせん部③「構造的に見落としてしまっているもの」とは何か。十七字以内でぬき出しなさい。

問4 ぼうせん部④「僕は文句を言う」とあるが、ここでいう「文句を言う」場面としてふさわしいものには○、適当でないものには×で答えなさい。

- ア 兄と弟が同じことをしたにもかかわらず、兄だけ親に怒られたとき。
- イ 国や会社が秘境に空港や工場を建設し、環境破壊をしようとしたとき。
- ウ 銭湯へ行ったものの、改修工事を行って休みだったとき。
- エ 薬局にマスクを買いに行き、店員に売り切れたと言われたとき。

問5 ぼうせん部⑤『ただそこにあるもの』を言葉で述べることができません」とあるが、なぜか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日常に「ある」という驚きを言葉であらわそうとすると、うそのように聞こえてしまうから。
- イ 日常に「ある」ということは気づいているものの、驚くべきものは理解できていないから。
- ウ 日常に「ある」という驚きだけでは、「無い」ということには気づくことはできないから。
- エ 日常に「ある」ということへの意識が薄れていき、「ある」ことを忘れてしまうから。

問6 ぼうせん部⑥「僕らの言語ゲームと逆の行為」とあるが、どのような行為のことか。本文中の言葉を使って三十五字以内で説明しなさい。

問7 本文の内容として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 現代の世界にあふれているアノマリーを受け入れて、別世界に贈与することが必要である。
- イ 現代において存在しているものすべては、誰かが歴史の過程で生み出した贈与である。
- ウ 現代の世界には無くなってしまった驚きを通して、隠されたありがたみが発見される。
- エ 現代に生きる僕らが「ある」ことに気づくためには、無くて当たり前前の世界を想像する必要がある。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「ねえ、デートしようよ」

マコトに誘われた。

夏休み初日の午後——家で宿題をしていたら、いきなり「ツヨシくんいますかーっ？」とマコトがやってきた。で、玄関でぼくの顔を見るなり、そう言ったんだ。

ドキッとした。

だって、そんなの……あたりまえだ……デートだなんて……。

A ぼくを見て、マコトはフフッと笑った。

「言い間違えちゃった」

「はあ？」

「プール行こう、って言いたかったの。あと、コーチして、とか」

プールとコーチがごっちゃになって、デートになった——？

ワケのわからない話だった。おまけにオチがわかってても、全然つままないし。

でも、そんな空振りのギャグを言ってぼくを誘ったマコトの気持ちは、なんとなくわかる。素直には言いたくないんだろうな、とも思った。

「ちよっと、なにポーツしてるの？ プール行くんでしょ、早く支度して、ダッシュで行こうよ」

ほら、こんなふうに短気っぽく言うところだって、照れ隠しっていうか強がりっていうか……。

でも、しょうがない。

スポーツ万能のマコトにとっては、生まれて初めて味わうクツジヨクの夏なんだから。

あのマコトが泳げないなんて、ぼくたちだってびっくりしたんだから……。

今年の夏は梅雨が長引いたせいもあって、一学期はほとんど水泳の授業ができなかった。もうすぐ終業式って頃になって、ようやくプール開き——その日は、泳げる距離によってグループ分けをした。

まず、二十五メートル以上泳げて、プールをターンできる子が集まった。これが『ターン組』。そこからさらに、スタート台から飛び込める子が分かれて、『飛び込み組』になる。

二十五メートルが泳げない子も、三つのグループに分かれた。長方形のプールの短いほうの端から端まで——十二メートルを泳げる子は『十二メートル組』になる。それはちよつとキツイなつていう子は『クロール特訓組』で、まだバタ足しかできない子は『バタ足組』になって、ビート板がないとバタ足もできない子は『ビート板組』……。

一年生の頃はクラスのほとんどが『ビート板組』だったけど、二年生、三年生と学年が上がるにつれて、みんなも泳げるようになってきた。今年は——。

「はい、じゃあ、自分の泳げるグループに入ってくださいーい！」

中山先生に言われて、ぼくたちはそれぞれのグループに分かれた。

さすがに四年生になると、クラスの半分以上は『ターン組』と『十二メートル組』だった。水泳が得意じゃない子も『クロール特訓組』と『バタ足組』に入った。もう、『ビート板組』なんて誰もいない……はずだったのに……。

① プールサイドが急にざわついた。

みんなのグループからぼつんと離れて、ビート板を小脇に抱いて立っている子が、一人いた。

それが、マコトだったんだ。

「ほんと、びっくりしちゃったなあ。この学校って、なんでこんなにみんな泳げるわけ？」

セミしぐれを聞きながら学校に向かう途中、マコトは「B」に言った。転校してくる前の学校では、ビート板を使う子が五、六人いたんだという。「わたし一人なんて、あーあ、カッコ悪いよーっ」

水着やバスタオルの入ったビニールバッグを振り回して、くちびるをツンととがらせる。

「ここは海も近いし、市民プールで水泳教室なんかもあるから」と、ぼくは言った。

「ツヨシが『飛び込み組』に入ったのも、水泳教室で練習したからなの？」

「ううん、オレは、去年の夏休みにパパと二人で特訓したから、ただけ……」

言ったあと、背中がひやつとした。お父さんのいないマコトにそんなこと言うの、かわいそう、だったかも——。

でも、マコトはあっさりとした様子で「そっか、いいなあ、パパがいるとコーチしてもらえて」と言った。

「……ごめん」

「なにが？」

「だって……お父さんのこと……」

② しょんぼりしたぼくの背中に、マコトはビニールバッグを軽くぶつけた。笑っていた。そして、ちょっとぼくをにらんでいた。

「気をつかうことないって。『かわいいそう』とか、そんなの思われるほうがイヤだから」

「……うん」

「悪いと思ってるんだったら、ちゃんとコーチしてよ。夏休みのうちに、ぜーったいに『飛び込み組』にならなきゃだめだから」

「ちょっと、それはキツくない？」

「いーのっ！ 番長命令っ！ もしもできなかったら、コーチの責任だからねっ！」

そんなあ……。

マコトの特訓はつづいた。

はつきり言って、わがままでと思う。もつとはつきり言っちゃえば、ちょっとメーワクもしてる。こっちだって夏休み前に立てた予定があるんだし、男子と女子が二人でプールに行つて、二人で水泳の特訓をするなんて……やっぱり、そういうの、デートって感じだし……。

タッチやジャンボは、プールで一緒になるたびに「ひょうひょうっ！」「あつっーいっ！」と冷やかしてくる。女子も、マコトのバタ足練習に付き合うぼくを見て、みんなでクスクス笑いながら、ないしょ話をする。

でも、マコトは、まわりのことなんかちっとも気にしていない。息継ぎに失敗して立ってしまつた<sup>③</sup>に、ぬれた顔を悔しそうに両手でふいて、

「もう一回！」「もう一回！」「もう一回！」……。

ほんとうに負けず嫌いなヤツだ。他人に負けるのがイヤなんじゃなくて、自分が「こうやりたい」と思ったことができないのが悔しくてしかたないみたいだ。

「あー、また失敗。なんで息継ぎがうまくできないのかなあ」

「顔を上げたときに足が止まっちゃうからだめなんだよ。ずっとバタ足つづけてなきゃ」

「わかってるよ、わかってるけど止まっちゃうんだもん……」

「あと、マコトは体ごと起こして息継ぎしてるけど、上げるのは顔だけでいいんだよ」

「わかってるってば！」

目に悔し涙が浮かんでるときだって、ある。

「ツヨシの教え方がへたなんじゃないの？ もっと、ちゃんと教えてよ！」

やつあたりだ、そんなの。

ぼくだって言い返す。

「こっちの教えたとおりにやらないから泳げないんだよ！」

「コーチがへたなの！」

「マコトがへたなんだよ！」

「もういいっ！ 明日からは一人で特訓するから！」

なんて、ケンカっぽく別れちゃうときもある。

でも、次の日には、やっぱりマコトはウチに来て玄関のチャイムを鳴らす。

ぼくも、「なんだよ、こっちもいそがしいのに」と言いながら、ビニールバッグに水着とバスタオルを入れる。マコトのために図書館で『スイミング入門』を借りてきたこと、あいつにバレなきゃいいけど……。

「それで、マコトくん、ちょっとは泳げるようになったのか？」

晩ごはんのとき、パパにきかれた。八月——お盆休みに入る前のことだ。

「うん、まあね」

照れくさかったから最初はテキトーに答えたけど、じつを言うと、マコトのがんばりはすごかった。

七月いっぱいにはバタ足の息継ぎがちっともできなかったのに、八月に入るとコツをおぼえたのか、ぐんぐん前に進めるようになった。

今日なんて、プールの短いほうの端から端まで、あとちょっとで泳ぎきるところだった。バタ足だけで『十二メートル組』に入る子なんて、五年生にもいないかもしれない。

「そうか、たいしたもんだなあ。さすがヒロカズの一人娘だ。根性があるんだよ」

パパは感心して、ママも横から「『X』って、まさにこのことよ。ツヨシもお手本にして、算数がんばりなさい」——って、チクツとお説教までする。

でも、やっぱりマコトってすごいよなあ、と素直に思う。泳げるようになったことがすごいというより、泳げなくても泳げなくても「もう一回！」とあきらめずにやりつづけたことが……ぼくには無理かもな、そういうの。

「じゃあ、バタ足はもう卒業して、そろそろクロールをおぼえたほうがいいんじゃないのか？」

「うん……」

そこなんだ、問題は。

バタ足は、ぼくが持ったビート板をマコトが両手でつかんで足の動かし方を練習することができた。ほんとうは手を直接つないだほうが練習しやすいんだけど、そんなの恥ずかしいし、ジャンボたちに絶対に冷やかされちゃうし。

でも、クロールは、そういうわけにはいかない。『スイミング入門』には、「コーチが水の中に両手を入れて選手のおなかを支えて、腕の振り方や息継ぎを練習するように」と書いてあるけど、マコトのおなかを手で支えるなんて……想像しただけで、顔が真っ赤になってしまう。

パパは、そんなぼくの気持ちを見抜いたのかどうか、のんびりした声で言った。

「クロールは、パパが教えてやろうかなあ」

「え？」

「次の日曜日、海水浴に行こう。マコトくんも誘ってみろよ」

「……ええーっ」

「待て待て、もつと乗れるよな、ウチの車」

わが家のマイカーは、ほんとうは仕事のひとが使う七人乗りのバンだ。三人家族なのに大きな車なんでもつたない、とママやぼくは思うけど、パパに言わせると「大きな車は、オトナのコードモ心をくすぐるんだ」だって。

「えーと、ウチが三人だろ。マコトくんを乗せて四人だろ。ってことは残り三人だから……」

「パパ、男子の友だちも誘っていい？ ほら、ジャンボとかタッチとかハマちゃんとか」

ぼくはあわてて言った。だって、そうだろ？ 両親と出かける海水浴に女子の同級生だけを誘うなんて、そんなの……うわっ、また顔が赤くなってきた。

「いいでしょ？ いいでしょ？ 友だち呼ぶよ、いいよね？」

「うん、それはいいけど……なんだ、せっかくマコトくんとデートさせてやろうと思ってたのに」

そんなこと言わないでよ、パパ。

「ツヨシもほんとは邪魔者がいないほうがいいんじゃないの？」

ママまで、なに笑ってるんだよお、やめてよお……。

でも、<sup>⑤</sup>パパはふとまじめな顔になって、付け加えた。

「マコトくんち、おばあさんのお世話があるから、夏休みでもどこにも遊びに行つてないんだろ？」

ママも、笑いをひっこめた顔で「お母さんも毎日仕事だつて言つてたからね」とつづけた。

あ、そうか……と気づいた。

マコトが毎日プールに通いつづけたのは、泳げるようになりたいからだけじゃなくて、夏休みのイベントが他にないから、だったのかもしれない。

（重松清『くちぶえ番長』）

問1 空欄 [A]、[B] に入る語句として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- A ア あわてる                    イ おこる                    ウ かなしむ                    エ よろこぶ  
 B ア 諦めかけたよう                イ 悔しそう                    ウ 寂しそう                    エ 他人事のように

問2 空欄 [X] に入る語句として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A 河童の川流れ                    イ 急がば回れ                    ウ 継続は力なり                    エ 虎穴に入らずんば虎子を得ず

問3 ぼうせん部①「プールサイドが急にざわついた」とあるが、その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A 四年生になり「ビート板組」には誰もいないはずだったが、スポーツ万能のマコトが泳げないとわかったから。  
 イ 四年生になったにも関わらずビート板を抱えて遊ぼうとしているマコトの様子に、驚きを隠せなかったから。  
 ウ マコトがやんちゃなことはみんな知っていたが、先生の指示を聞かずビート板で泳ごうとしたことに焦ったから。  
 エ 運動が得意なはずのマコトが『ビート板』を抱えている姿を見て、転校先の自分たちに嘘をついていたことがわかったから。

問4 ぼうせん部②「しょんぼりしたぼくの背中」とあるが、その時のぼく的心情として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A 何気ない言葉が自慢のようになってしまい、マコトを幻滅させてしまったのではないかと思っている。  
 イ 特訓内容を秘密にしていたことで、マコトを怒らせてしまったのではないかと思っている。  
 ウ 父親がいないと特訓が成立しないと知られ、マコトを落胆させてしまったのではないかと思っている。  
 エ 配慮に欠けた言葉を発してしまい、マコトを傷つけてしまったのではないかと思っている。

問5 ぼうせん部③「ぬれた顔を悔しそうに両手でふいて」とあるが、その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 同級生たちに冷やかされるから。
- イ ツヨシが迷惑だとおもっているから。
- ウ 特訓しても泳ぎが上達しないから。
- エ 同級生たちは上手に泳げるから。

問6 ぼうせん部④「と言いながら、ビニールバッグに水着とバスタオルを入れる」とあるが、ここから読み取れるぼくの心情を四十字以内で説明しなさい。

問7 ぼうせん部⑤「パパはふとまじめな顔になつて」とあるが、その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア マコトが夏休みになつてもツヨシを訪ねてくることに疑問を抱き、二人の関係を真剣に問い詰めようとしたから。
- イ プールではなく海で練習をすることで緊張感が生まれ、マコトのわがままが少しは落ち着くと考えたから。
- ウ 夏休みでも家族にあまえることが難しいマコトのことを思い、冗談ではなく真剣な話をしようとしたから。
- エ 夏休みでも家族で遊びに行けないマコトのことを考えたら、海水浴は自粛して自宅で過ごすべきだと考えたから。

問8 本文の内容として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 会話文だけでは表現しきれない心情の動きを、語り手が補足しながら物語が展開している。
- イ 回想を挟まずに現在進行形で物語を進めていくことで、夏休み特有の疾走感が際立っている。
- ウ 全体を通して大人びた言葉をあえて使うことによって、四年生の気持ちに共感しやすくなっている。
- エ ……や——を多用することによって全体的に緊張感が生まれ、複雑な心情を表現している。

## 四

次の各問いに答えなさい。

## 問1

①・②の□にふさわしい言葉を後から選び、ことわざを完成させなさい。

① □の子を散らす

ア はち      イ か      ウ はえ      エ くも

② □の行水

ア はと      イ はずめ      ウ からす      エ あひる

## 問2

次の空欄にあてはまる言葉を後から選び、記号で答えなさい。

① 彼は（ ）ぼくのミスを言いふらしている。

ア 聞こえよがしに      イ はかなくも      ウ もうしぶんなく      エ いてもたっても

② （ ）な原因を直さない限り何も変わらない。

ア 積極的      イ 主観的      ウ 根本的      エ 感傷的

## 問3

次の文の中から主語・述語の関係になつてゐるものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 坂道を 歩いていく。      イ 妹の趣味も 僕と同じだ。

ウ 少しだけ わけてもらった。      エ 駅前で 待ち合わせよう。

## 問4

次の文のうち、ぼうせん部の品詞の種類が違つたものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア この問題の難易度は低くない。      イ 特に何の不自由もない生活。

ウ まだお腹が空いていない。      エ 元気のない友達に声をかける。

以下余白







—